

自転車業界研究

中庭ゼミ 22111284 長谷川雄大

はじめに

ここでいう自転車業界とは日本国内のみに限定とし、さらに今回はスポーツバイクを中心に取り扱うことにする。自転車業界は海外まで含めると、膨大な量の自転車フレーム、コンポーネントのメーカーがある。自転車産業に関する先行研究は管見の限り見受けられなかったため、今回はそのアウトラインを示すこととする。

スポーツバイクとは

スポーツバイクとはシティサイクル、いわゆるママチャリとは違い巡行性能に優れた自転車の一つで長距離を快適に移動するものもあれば未舗装路を走破するための自転車である。基本的には競技や嗜好品として使われることが一般的である。

自転車を構成するものをコンポーネントといいブレーキセット、クランクセット、ディレーラー、チェーン、フレームの大きく分けて5つのもので構成されている。

業界産業マップ

自転車産業マップを制作するとサプライチェーンがよくわかる。川上にはコンポーネントの企業であるシマノがおりその下にフレーム製造を行う企業、その下に仲卸業者であるキャットアイなどがある。そしてそこから小売業であるあさひ、コギーなどがある。直接小売業者にフレームを供給することもある。

自転車の輸出入と国の関係

自転車の輸出を見てみると、日本からの輸出が一番多いのはドイツになっており、続いて台湾、中国という流れになっている。これは現在ドイツがもともと自転車大国であることと、車社会から自転車社会に転換していることが挙げられる。ドイツでは環境意識が高く、自動車ではなく環境に

やさしい自転車や徒歩での移動を行うまちづくりを行っている。さらに、自転車が嗜好品としてのイメージが強いドイツでは、ママチャリのような電動自転車ではなく、スポーツバイクのような電動自転車、E-バイクの需要が高い。そのため、自転車でもホダカやブリジストン、ヤマハなどのE-バイクの輸出が高いと考えられる。

日本に対する一番の輸出相手国は中国となっており、二番目に台湾となっている。輸入で一番多いのは中国であるが、自転車一台当たりの金額を見てみると台湾は95,459円、中国は16,062円と中国の方が安い。ここから分かることは、中国は安価な自転車を多く日本に対して輸出しており、台湾は高価な自転車を輸出していることが分かる。台湾はカーボンの成型技術が高く、TRIGON、GIANTなどのOEMが多く存在することがこのような結果になっているのではないだろうか。

結論

スポーツバイクは嗜好品としての価値が強い。それは海外だけではなく日本も同様である。様々な人から話を聞くと、スポーツバイク愛好者は自転車にかかる消費額に糸目がないことがよくわかる。直接本社からフレームを取り寄せる人もいれば、オークションで高いお金を出してでも落札する人もいる。つまり、どんな手段を使ってでも落札するような人たちが多い。現在、スポーツバイク業界は自動車などと同じように電気の方にシフトしており、需要が高いのは環境意識が高いヨーロッパ諸国であることも分かった。